

フロントランナーに聞く 教育のnext

「これからは予測困難な社会となる」と言われ続けてきたことが、新型コロナウイルスの世界的流行で現実のものとなり、私たちの前に突きつけられました。そうした状況下で、未来の社会を築く子どもたちの教育を、どのように描いていけばよいのでしょうか。教育の最先端で活躍する人たちへのインタビューから、次代の教育のあり方に迫ります。第1回は、映画「Most Likely to Succeed」を日本に紹介し、教育関係者が集うイベントの開催や、教員研修・学校視察などを通じて、21世紀にふさわしい教育を追究し続けている竹村詠美さんに聞きました。

子どもが安心して個性を発揮できる場がすべての教育活動の土台となる



映画「Most Likely to Succeed」
アンバサダー
一般社団法人FutureEdu 代表理事
竹村詠美

たけむら・えみ 慶應義塾大学卒業後、経営コンサルティング会社を経て、エキサイト・ジャパン取締役に就任。その後、アマゾンやディズニの日本経営において、マーケティング責任者を務める。2011年、イベント管理・チケット販売サービス「Peatix.com」を共同創業。現在、Learn by Creation 代表理事、Peatix.com 相談役、総務省情報通信審議会委員などを務める。ウォートン・スクール MBA ならびにペンシルベニア大学国際関係学修士号を取得。2児の母。近著に『新・エリート教育 混沌を生き抜くためにつかみたい力とは?』（日本経済新聞出版）。

キーワード 1

コレクティブ・インパクト

—新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、学校教育には様々な影響が出ています。そうした中で、学校のあり方についてどのようなことを考えましたか。

竹村 コロナ禍は、先を見通しにくい時代を象徴する出来事だと捉えています。そうした時代に社会を築いていく子どもたちへの教育について、私たちは考えを新たにすることが必要だと強く感じています。

社会には、紛争や貧困など複雑な問題が山積しています。そうした問題の解決に向け、様々な立場の当事者が異なる価値観や強みを出し合って取り組む「コレクティブ・インパクト」*1という考え方が求められています。例えば、映画制作には、監督や俳優のほかに、撮影、音楽、衣装などの様々な専門職がかかわります。それぞれの役割を果たすために意見がぶつかることもありますが、映画をつくるという共通の目標があるからこそ、互いを尊重し、力を引き出し合いながら完成に向けて進んでいきます。「コレクティブ・インパクト」は、まさにそうした状態を指します。

社会は、異なる技能や価値観を持つ人たちによって構成されています。社会の一員である以上、多様な他者との協働は必要不可欠です。だからこそ、学校は、子どもが「コレクティブ・インパクト」を体験できる場であることが大切だと考えます。

—具体的にはどういった場になるのでしょうか。

竹村 自分の強みを生かせる委員会活動、学校行事での役割分担などがあてはまると思います。グループで行うPBL*2や探究学習は、「コレクティブ・インパクト」を体験す

* 1 2011年、John Kania と Mark Kramer が『Stanford Social Innovation Review』で発表した論文「Collective Impact」で定義された言葉。

* 2 Problem Based Learning、あるいは Project Based Learning の略。問題解決型学習のこと。

る絶好の場です。「作文が得意だから、発表の原稿を書くよ」「映像加工が好きだから、調べた内容を紹介するビデオを編集したい」など、自分の役割をそれぞれが担い、協働しながら1つの目的に向かって取り組む学習だからです。

キーワード 2

AIにはできない3つの「C」

—他者と協働で行う「コレクティブ・インパクト」は、人間ならではの行為です。その実現のためには、どういった資質・能力が必要になると考えますか。

竹村 AIの時代に人間がどうあるべきかは、現代を生きる私たちにとって重要なテーマです。そもそも、AIではなく人間にしかできないこととは何でしょうか。私は、Compassion（慈悲）、Creativity（創造性）、Communication（意思や感情、思考のやり取り）の3つの「C」だと考えます。

その中で最も重要だと考えるのは、他者を思い、寄り添い、ケアをする慈悲の心、Compassionです。振り返ってみると、近年の日本はいわゆる偏差値偏重社会で、学校でも他人と競争して少しでも上位に立つことが成功への糸口になるとされてきました。しかし今、学校に期待されている「主体的・対話的で深い学び」は、正解が1つとは限らない問題について子どもが協力し合って答えを探す営みです。そこで必要となるのは、他者との競争ではなく、Compassionにあふれ、思いを語り合い、他者に寄り添うことです。

グローバルな問題に向き合う際にも、Compassionが求められます。世界共通の課題である環境問題は、資本主義の論理だけでは、子どもが夢を持って生きていける時代ではないことを示しています。安くて質のよい商品が手に入る裏側には、環境破壊や児童労働などの問題が隠れているのではないかと想像力を働かせ、ともに地球に生きる存在として思いをはせる……。そうしたことが、私たちには必要であり、その土台としてCompassionは欠かせません。

Creativityも人間だけができる行為です。ところが、日本の若者は、失敗を恐れて創造しようとしなないとされています。その原因は、そもそも幼少期から失敗する経験があまりしていないからだと考えます。学校での学びにおいても、失敗も1つの経験と捉えて、創造的な学びに挑戦する機会を設けてほしいと思います。創造性といっても、大げさなことではありません。例えば、夕飯の支度をやる親の姿を見て、自分で料理を作ってみるのも1つの創造です。—毎日の生活の中で「創造」はできるということですね。

竹村 慶應義塾大学の井庭崇教授は、これからの社会のあり方として「創造社会」を提唱しています。私なりに説明すると、例えばこれまで企業でなければ製造できなかった

映画「Most Likely to Succeed」とは？

竹村さんは、自身の子どもへの教育に対する問題意識から、最先端の教育活動を行う国内外の学校を視察・調査。その中で出会ったのが、アメリカの高校生がPBLを通じて成長していく過程を追ったドキュメンタリー映画「Most Likely to Succeed」だ。被写体となる高校では、クラス単位でPBLに取り組み、成果を学期末に一般公開する。カリキュラムは教員個々に任せられ、教科書や定期試験はない。竹村さんは、その学びに衝撃を受け、日本にも紹介したいと国内での上映会を開始。上映後には、参加者が自分の問題として考えられるよう、映画の感想や気づきを語り合う場を設けた（写真）。教育委員会や学校単位でも上映会は開かれるようになり、その回数は2020年7月時点で500回以上となる。



2019年夏には、「主体的・対話的で深い学び」について、教育関係者、保護者、子ども、起業家やクリエイターなどの社会で創造的実践を行う人々が対話するイベント「Learn by Creation2019」を主催。さらに、アメリカの学校視察のコーディネーター、教員研修などを実施し、コロナ禍でも、オンラインでの研修会やセミナーを開くなど、積極的に活動している。

◎映画の詳細内容や視聴方法は下記をご覧ください
<http://www.futureedu.tokyo/most-likely-to-succeed>

自動車が、今では製造に必要なノウハウや材料を入手しやすくなり、その気になれば個人でもつくることができるようになりました。つまり、創造の担い手が「組織」から「個人」へと移る。それが「創造社会」です。

もちろん、ノウハウや材料の入手が容易になったとしても、意欲がなければ創造には至りません。人間が生まれながらの創造の担い手であることは、幼稚園の砂場遊びを見れば明らかなのに、小学校、中学校と進んでいくうちに創造性を失ってしまっている実態が、複数の調査から指摘されています。人間が本来持っている創造性を磨き、表出させていくために、教員や保護者、そして子ども自身も失敗を楽しむ余裕を持てるようになればと思います。

最後に、Communicationは、自分の思いを他者が理解できるように伝えるために必要とされる力です。「コレクティブ・インパクト」が注目されているように、組織を超えて多様な人々と協働する場面が多くなり、そこでは組織の役割や肩書を外して自分の言葉で語る力が重要になるからです。

最近、本業とは別に社会的な課題に取り組む「2枚目の名刺」で活動する社会人が増えています。それは、社会が変化しつつある表れでしょう。グローバル化が進む今は、いつ、どんな人たちと協働することになるか分かりません。だからこそ、所属する組織から外れて、私は何者であるかを自分の言葉で伝えられる、Communicationの力が必要です。

キーワード 3

自分らしくいられる安心・安全の場

—それらの資質・能力を子どもに育むために、学校教育には何が求められるのでしょうか。

竹村 3つのCを育成し、「コレクティブ・インパクト」を体験できる場にするためには、学校や教室が、誰もが自分の考えを発言したり、強みを発揮したりできる、安心・安全な場であることが最も重要です。そうすることで、子どもは伸び伸びと自分の力を発揮して、失敗したり、周りから指摘されたりしながらも様々なことを吸収して、成長していくでしょう。新学習指導要領で求められている主体性や協働性などの育成にもつながるはずです。

これまでの日本の公教育では、コミュニティーの総意として決まったルールを大切に、皆で行動することが重視されてきました。教室の掃除や給食の配膳などは、集団における自分の役割を果たす意識を養うという意味で、世界的にも秀でている部分です。ただ、そうしたよい部分が同調圧力として働いてしまい、不登校やいじめという形で表れてしまっていることを、とても残念に思います。

本来、子どもは一人ひとり豊かな個性を持って生まれてきています。多様性やインクルーシブの必要性が叫ばれている今こそ、1つのことを皆が同じようにする風潮から脱する好機ではないでしょうか。

—安心・安全な場はどうすれば築けるのでしょうか。

竹村 道徳の時間などに、子どもが思いを語り合える場をつくれるのではないのでしょうか。日々の授業でも、例えば、発表の際に全員が同じ方法で行うのではなく、演劇をしたり、絵や立体で表現したりと、発表方法を子どもに選ばせることや、独自の取り組みをする子どもをクラスで紹介する

ことなどを通じて個性を認めることが、心の安心・安全につながると思います。同様の背景から、アメリカの学校でも、「Social and Emotional Learning (SEL)」という社会性と情操を育む教育を正課に導入する動きが広がっています。

学校が子どもにとって安心・安全な場であることは、コロナ禍において特に重要です。子どもの成長には規則正しい生活環境が大切ですが、コロナ禍でそうした生活が変わったり、保護者が職を失ったりして、子どもの心身に大きな影響を与えています。そうした中で、子どもが安心して過ごせる場所として、学校は最後の砦になるのではないのでしょうか。想定外の事態においても学びを止めないことは大切ですが、その前提として、学校がどんな時でも子どもが自分を開示できる場であってほしいと願っています。

キーワード 4

「チーム学校」と教育格差の縮小

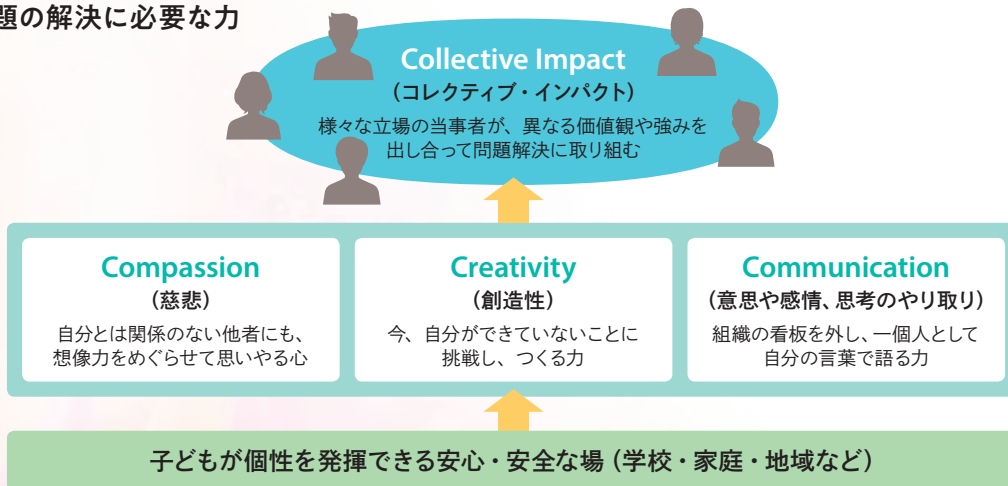
—主催する教員研修などで大勢の先生とお話しされていると思います。学校が次代の教育を築くためには、何が重要だと考えますか。

竹村 まず、目の前の子どもに必要なのか、教員同士で自身の教育観を語り合うことが重要だと思います。その対話から目標を見いだすことで、子どもに寄り添った学びをつくることができるのではないのでしょうか。

そして、その語り合いに、子どもや保護者、地域の人々を巻き込み、目標を共有し、多様な価値観を反映させた教育にしていくことが、次のポイントになります。それが、「チーム学校」の意味するところだと考えます。

学校が社会に開かれるよさは、子どもの教育格差の縮小につながることにあります。様々な能力と経験を持つ人が

● 社会問題の解決に必要な力



*竹村さんへの取材を基に編集部で作成。

学校にかかわることで、子どもは多様なロールモデルと出会い、自分の世界と学びの機会を広げることができるからです。子どもの教育に貢献したい人は大勢います。例えば、学童保育に地域の人たちがボランティアで参加するなど、子どもと大人がかかわる仕組みづくりを、学校と保護者や学外の大人が協力することで実現するのではないのでしょうか。コミュニティスクールの仕組みも、学校と社会をつなぐ役割としての可能性を秘めています。

また、場を設けるとともに、子どもと大人を教育的な意味でつなぐことも重要です。例えば、社会人講話では、多くの場合、話す内容は講師に委ねられています。しかし、子どもの学びを充実させるためには、すべてを講師に任せるのではなく、少なくとも、クラスや学校の状況、講話を通して期待する子どもの姿をあらかじめ講師に伝えて、理解してもらうことが望ましいでしょう。

探究学習がうまく機能している学校に話を聞くと、教員同士や教員と外部とのコミュニケーションの時間が業務内に確保され、教員が子どもと外部をつなぐ役割を担っていました。教員の業務を見直して、どうすれば教員同士、教員と保護者、教員と地域、そして教員と子どもが協働して教育活動に取り組めるのかを考えたいものです。



学校という社会に、
子どもが能動的にかかわることに
大きな意味があると思います

身近な助言者からの学びの方が、よりリアルでパワフルなのかもしれません。中学生は小学生の、高校生は中学生の助言者となり、ともに考えるような教育活動を、自治体単位でプログラム化してはどうでしょうか。

多様な人との協働が必要とされている時代に、学校こそが人々の越境を歓迎し、多様な人々が出会う場になれると思います。地域資源を生かし、学校に気軽にかけられるような仕組みづくりを期待していますし、そこで学ぶ子どもが、学びのデザインや実行に参加できればもっとよいと思います。社会人講話でどんな人のどんな話を聞きたいか、子どもに尋ねてみてください。そして講師のうち1人でも「きみたちが呼んだ人だよ」と連れてきたら、子どもはどう反応するのでしょうか。それは単に興味のある人の話を聞けるというだけでなく、学校という社会に能動的にかかわる機会を得るという大きな意味があります。学校という学びの場を自分でつくっていることを子どもが自覚できれば、子ども自身のWell-beingにもつながると思います。

キーワード 5

子どもが学びをデザインする

—「子どもと教員の協働」とは、子ども自身が学びづくりにかかわるということでしょうか。

竹村 私の子どもが通うアメリカの幼稚園から高校までの一貫校では、「共生」とはどのようなものか、子どもと教員が真摯に議論しています。先日開かれた中学生のオンライン集会では、ゲストスピーカーの高校生が、人種やジェンダーの問題にどう向き合うべきか、自身の体験を踏まえながら中学生と語り合っていました。私はその様子を見て、子ども同士でも、対話によって豊かな学びが実現できるのだと感動しました。子どもには、著名人との出会いよりも

竹村さんとウェブ上で対話しませんか

From the front-runner

竹村さんから読者の皆様へのメッセージを動画でご視聴いただけます。

To the front-runner

竹村さんへのご質問や、本コーナーへのご意見・ご感想をお寄せください。竹村さんへのご質問には、ご本人からの回答をウェブサイト上で公開します。ご質問内容は、本コーナーの内容に関するもののほか、映画「Most Likely to Succeed」、近著『新・エリート教育 混沌を生き抜くためにつかみたい力とは?』に関するものも大歓迎です。

※ご質問内容によっては、公開を控える場合もございます。ご了承ください。

竹村さんのメッセージ動画、
質問フォームのアクセスはこちらから!

<https://berd.benesse.jp/magazine/board/booklet/?id=5544>

VIEW21 教育委員会版 検索

右記QRコードからも
アクセスできます。▶▶▶

